

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

1日

赤口 女

旧2月23日

月曜

妙法蓮華経化城喻品第七

不識苦尽道

「苦しみを断つ道がわからない」

思い通りにならない世の中だとわかっ  
ても、なぜ思い通りにならないのかが  
わからずに苦しむのが私たち凡夫  
です。

原因がわからなければ、対処法も  
解決策も見つかりません。

苦しみの原因も、それを取り除く  
方法もわからずジタバタもがいて  
いると、さらに迷いが深くなる  
ものです。

そこから脱する道が仏道な  
のです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

2日

先勝 虚

旧2月24日

火曜

妙法蓮華経化城喻品第七

げん

そん

しよ

てん

じゆ

## 減損諸天衆

「諸天衆が減損する」

「諸天衆」とは天上界の住人のこと。

天上界は悦びの世界を表しています。

迷いが深くなると「諸天衆」も暗い餓鬼道や畜生道ををさまようことになり、悦びをもって毎日を送る者が減ってしまいます。

また、「諸天衆」は仏教信仰者を守護する役割も担っているため、仏の道から外れ迷いの中にいる者が増えると、守護の「諸天衆」が減り、国がますます乱れるという悪循環に陥ります。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

3日

友引 危

旧2月25日

水曜

妙法蓮華経化城喻品第七

じつぼう かくごひやくまんのかく しよぶつせかい

十方各五百万億諸仏世界

「五百万億もの仏の世界が感動に打ち震えた」

大通智勝仏が悟りを得たとき、十方の五百万億の諸仏の世界が六種に震動しました。

数えきれないほどの仏の国が震動したということとは、どこに行っても通用する仏の教えに天地も打ち震えて感動したことを示します。

そして、それぞれの仏国土で道に迷っていた人々が仏さまの慈悲の光に照らされて、顔を見合わせ、迷っているのは自分一人ではないと気づき、自己中心の考えを改めたのでした。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

4日

先負 室

旧2月26日

木曜

妙法蓮華経化城喻品第七

かく いくう でん

ぶ じょう ひ ぶつ

各以宮殿

奉上彼仏

「宮殿を仏に献上する」

梵天王は宮殿を大通智勝仏に献上しました。

仏さまに宮殿を献上すると、宮殿が仏さまのも  
のとなり、献じた者はその宮殿で仏さまの教え  
を聞き、仏さまに近づくことができます。

仏さまに受け取っていたただくことは、ありがた  
くこれほど嬉しいことはないといふのです。

お寺に布施をするのも、仏さまに物や行ないを  
お供えして、仏さまの教えをいただき、悟りに  
近づくためなのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

5日

清明

仏滅 壁

旧2月27日

金曜

妙法蓮華経化城喻品第七

ぼん

てん

こん

じょう

梵天懇請

「梵天が仏に説法を請い願う」

大通智勝仏が悟りを得た時、十方の諸仏の国は震動し、慈悲の光に包まれました。

その時、東方・東南方・南方・西南方・下方・上方、それぞれの国の梵天たちは驚き、大通智勝仏が悟りを開いたことを知り、大いに喜び、宮殿を献上し、教えを説くように要請します。お釈迦さまが菩提樹下で悟りを開いた時にも、娑婆世界の衆生に説法を要請したのも梵天たちでした。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

6日

友引 虚

旧2月28日

土曜

妙法蓮華経化城喻品第七

せ おう りょう ぞく そんな

世雄両足尊

「世の中で最も勝れた存在である仏さま」

「世雄」とは世の中で最も勝れていること。

「両足」とは福と慧の両方を具えていること。

「世雄両足尊」とは仏さまの尊称です。

尊い教えを説き大いなる慈悲の力で苦悩の中にいる衆生をお救いくださいと、梵天たちが大通智勝仏に請い願った際の尊称が「世雄」です。

梵天たちは、説法を聞いて仏に近づきたいと願い、その思いが伝わり、大通智勝仏は黙然としてその願いを受け止めたのでした。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

7

日

赤口 婁

旧2月29日

日曜

妙法蓮華経化城喻品第七

じょう

じゅ

てん

ちゅう

てん

聖主天中天

「天界を超えた世界の仏さま」

「天中天」とは仏さまのこと。

天界は人間界を一段超越した苦のない喜びの世界、「天中天」は天界をさらに超越した苦も楽も超えた仏さまの世界です。

人間界にいる私たちには想像し難い世界です。

天中天の仏さまは「迦陵頻伽（かりょうびんが）」とい

う鳥のような美しい声で教えを説き、人々の心

に深く沁み渡り、憐れみをもって苦楽を除き、

救ってくださるのです。

# 妙法蓮華經藥草喻品第五

衆生常苦惱 盲冥無導師 不識苦尽道 不知求解脫 長夜增惡趣 減損諸天衆  
從冥入於冥 永不聞仏名 今仏得最上 安穩無漏法 我等及天人 為得最大利  
是故咸稽首 帰命無上尊

〈略〉

仏告諸比丘。大通智勝仏。得阿耨多羅三藐三菩提時。十方各五百万億諸仏世界。

〈略〉

即時諸梵天王。頭面礼仏。繞百千唱。即以天華。而散仏上。其所散華。如須弥山。竝以供養。仏菩提樹。其菩提樹。高十由旬。華供養已。各以宮殿。奉上彼仏。

〈略〉

世尊兩足尊 唯願演說法 以大慈悲力 度苦惱衆生

〈略〉

聖主天中天 迦陵頻伽声 哀愍衆生者 我等今敬礼



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

8日

先勝 胃

旧2月30日

月曜

妙法蓮華経化城喻品第六七

によ う どん ば ら

## 如優曇波羅

「仏さまの教えには会い難い」

「優曇波羅」は三千年に一度咲く花で、仏さまの教えに会い難いことの喩えに使われます。

苦しみを取り除こうともがいているうちに、次から次へと苦しみがわいてくることがあります。

それは霧をホウキで掃いているようなもので、掃いても掃いても終わりがありません。

そんなときに仏さまの教えに出会うと、霧が晴れるように苦しみが除かれます。

そんな出会いが稀で有難いということです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

9日

先負 胃

旧3月1日

火曜

妙法蓮華経化城喻品第七

のう

かい

かん

ろ

もん

## 能開甘露門

「甘露の門を開く」

「甘露」は天上の神々の飲む甘い霊液で、飲むと不死を得るといわれています。

転じて、仏さまの教えに喩えられます。

「甘露」は甘さや甘辛さを表現する言葉として日常生活にも浸透していますが、本来の意味は苦が消滅した、平穏な心の状態を表しています。

天から降る甘露は、人々に悦びを与え、苦しみを取り除き、悟りへと導きます。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

10

日 水曜

仏滅 昴

旧3月2日

妙法蓮華経化城喻品第七

がん に し くどく

願 以此 功德

が どうよ しゅじょう

ふぎゅう お いっさい

普及 於 一切

かいぐ じょうぶつどう

我等 与 衆生

皆 具 成 仏道

「大乘仏教を学ぶ者の心得」

梵天たちは、仏の救いが限りないことを理解したうえで、大通智勝仏の説法を請い願い発した言葉です。

仏教に帰依して自分が救われるだけでなく、仏さまの教えが広く行き渡り、自分も皆も共に仏に成る道を進もうと願う大乘仏教を学ぶ者の心持ちを表した言葉です。

宗派を超えて、経典を読誦した後、回向文等に用いられています。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

11

大安 畢

旧3月3日

木曜

妙法蓮華経化城喻品第七

じつぽうしよぼんてんのう

ぎゆうじゆうろくおうじしよう

十方諸梵天王 及十六王子請

「遠い世界の梵天も、息子たちも教えを求めた」

十方の梵天王というのは、果てしなく広い世界中の住人のことを指し「非常に縁の遠い者」を表しています。

大通智勝仏の十六の王子は、仏の子であるから「最も縁の近い者」を表しています。

縁の遠い者と近い者の両方から教えを説くようにと懇請されていることから、世の中のすべてのものが教えを求め、そしてすべての者に教えが必要であることを表しています。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

12

赤口 鶯

旧3月4日

金曜

妙法蓮華経化城喻品第七

さん てん  
じゅう に ぎょうほう りん  
三転 十二行法輪

「三たび十二行の法輪を転じたもう」

大通智勝仏は最初に「苦・集・滅・道」の四諦を三回繰り返して、十二行の法を転じました。

三転にはそれぞれ次の意味があります。

- ① 示転：四諦を実際の事柄に当てはめて示す
- ② 勧転：四諦を理解して実践するように勧める
- ③ 証転：四諦であると見極めて実践し証明する

このように視点を變えての説法は仏にしかできない独特なもので、お釈迦さまの最初の説法「初転法輪」でも十二行法輪が説かれました。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

13

先勝 参  
旧3月5日

土曜

妙法蓮華経化城喻品第七

示じ転てん

「まずは説き示す」

「三転十二行」の一転目は「示転」。

「示」とは説き示すことであり、仏さまがお悟りになったそのままに説き、伝えることです。

しかし、教えを聞いてすぐ理解し、実行できる人ばかりではありません。

関心も持たず、聞き流し、実行しようとしてもしない人も少なくないでしょう。

仏さまはどんな人も見捨てることなく、次の手を差し伸べて下さいます。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

14

友引 井

旧3月6日

日曜

妙法蓮華経化城喻品第七

かん てん

勧転

「次に実践するように勧める」

「三転十二行」の二転目は「勧転」。

「勧」とは仏さまの教えを信じ、実践するようにと勧めることです。

教えを聞いたただけでは実生活にも生かされず、世の中が良くなることもありません。

仏さまの教えを実践するように勧めるのです。

しかし、勧められてしばらくは努力をしても、すぐに結果があらわれないと気が抜けてしまう人も少なくないでしょう。

# 妙法蓮華經化城喻品第七

以法雨充滿 昔所未曾觀 無量智慧者 如優曇波羅 今日乃值遇

〈略〉

愍哀群萌類 能開甘露門 広度於一切 於昔無量劫 空過無有仏

〈略〉

唯垂哀納受 願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道

〈略〉

爾時大通智勝如来。受十方諸梵天王。及十六王子請。即時三轉。十二行法輪。

若沙門。婆羅門。若天。魔梵。及余世間。所不能轉。謂是苦。是苦集。是苦滅。

是苦滅道。及広説。十二因縁法。無明縁行。行縁識。識縁名色。名色縁六入。

六入縁触。触縁受。受縁愛。愛縁取。取縁有。有縁生。生縁老死憂悲苦惱。無明

滅則行滅。行滅則識滅。識滅則名色滅。名色滅則六入滅。六入滅則触滅。触滅則

受滅。受滅則愛滅。愛滅則取滅。取滅則有滅。有滅則生滅。生滅則老死憂悲苦惱



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

15

日

月曜

先負 鬼

旧3月7日

## 証 転

じょう てん

妙法蓮華経化城喻品第六七

「最後に手本を示し証明する」

「三転十二行」の三転目は「証転」。

「証」とは仏さまが悟られたことや、仏さまが実行されたことを事実として証明すること。

仏さまは、その人が実践したことが真の悟りを得る道に沿っているか、手本を示し証明するよう道を開いて下さいます。

説き示し、じ実践するように勧め、手本を示し証明する。このように視点を變えて、三段階で導いてくださるのが仏さまです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

16

日 火曜

仏滅 柳

旧3月8日

妙法蓮華経化城喻品第七

謂い是ぜ苦く

是ぜ苦く集じゅう

是ぜ苦く滅めつ

是ぜ苦く滅めつ道どう

「苦・集・滅・道の四諦法」

「苦・集・滅・道」の「四諦法」を三転するのが「十二行法輪」です。

「苦」は不満足・思い通りにならないこと

「集」は煩惱の集まり・苦しみの原因のこと

「滅」は迷いを滅した状態

「道」は悟りに入るための方法手段

この「苦集滅道」の四つを三段階に渡り、徹底的に諦らかにすることによって、悩みや苦しみから解き放たれることを目指すのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

17

大安 星

旧3月9日

日 水曜

妙法蓮華経化城喻品第七

じゅう

に

いん

ねん

ほう

## 十二因縁法

「苦悩を滅するのための十二の条件」

大通智勝仏は次に「十二因縁法」を説きます。

「序品」の日月灯明仏も説いた教えです。

迷い（無明）、行い（行）、もって生まれた性質

（識）、体と心（名色）、眼耳鼻舌身意の六根

（六入）、感覚（触）、感情（受）、愛憎の念

（愛）、選択（取）、差別（有）を抱き、生き

（生）、老いて死ぬこと（老死）。

この十二因縁を繰り返す凡夫の一生から離れる

ことを徹底的に求める修行法を示されました。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

18日

赤口 張

旧3月10日

木曜

妙法蓮華経化城喻品第七

む

みよう

## 無明

「あらゆる苦しみの原因」

十二因縁の第一、「無明」とは心が明らかではないこと、智慧が十分に備わっていないこと。

教えも受けず、道も学ばずに、真つ暗な通りに放り出されたら誰でも迷ってしまいます。

無明はあらゆる苦しみの根本的な原因です。

無明であるがゆえに、物事の因果関係を理解できず、煩惱をとという欲望に飲み込まれてしまうのです。

無明を解決すれば心は安らかになるのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰  
2024年

4月

19日

金曜

穀雨

先勝翼

旧3月11日

行ぎょう

妙法蓮華経化城喻品第七

「無明の中で行動しないように」

十二因縁の第二「行」とは行い、行動のこと。

無明ゆえに心に迷いを抱いたまま行動すれば、  
問題に突き当たることは必定です。

無明という明かりのない暗闇の中で下手に動き  
回ると、自分の立ち位置も見失い、さらに迷路  
の奥をさまよい、恐怖や疑念まで生じます。

迷路の出口に導く光が仏さまの慈悲です。

その光に向かって、仏さまの智慧を学ぼうとす  
る行動こそが「行」なのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

20

友引 軫

旧3月12日

土曜

妙法蓮華経化城喻品第七

識しき

「不完全な性質のまま人生を終えないように」

十二因縁の第三、「識」とは識別する働き。

識は生まれたときに具わっている性質であり、

何も学ばずに成長すると生まれたときの不完全

な性質のまま年老いてしまいます。

仏さまの智慧を学び、長所を伸ばし、欠点を修

正していくから、人生が豊かになるのです。

無明のまま行動すると、「識」も育ちません。

「行」によって「識」が影響されるので、「無明

の行」は「識」の迷いのもとになるのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

21日

先負 角

旧3月13日

日曜

妙法蓮華経化城品第七

みよう

しき

名色

「健全な心身を育む」

十二因縁の第四、「名」は心、「色」は身、「名色」は心身のこと。

生まれたときに具わっている性質「識」が育ってくると、心と身体も発達してきます。

赤ちゃんが表情が豊かになり言葉を覚え、ハイハイし、やがて立って歩く過程で、周囲の大人が愛情もって接すれば、情緒が安定し心も身も育まれていきます。

凡夫の「名色」も仏さまによって育まれます。

妙法蓮華經化城喻品第七

〈略〉

爾時大通智勝如來。受十方諸梵天王。及十六王子請。即時三轉。  
十二行法輪。若沙門。婆羅門。若天。魔梵。及余世間。所不能轉。  
謂是苦。是苦集。是苦滅。是苦滅道。及広説。十二因縁法。無明縁行。  
行縁識。識縁名色。名色縁六入。六入縁触。触縁受。受縁愛。愛縁取。  
取縁有。有縁生。生縁老死憂悲苦惱。無明滅則行滅。行滅則識滅。  
識滅則名色滅。名色滅則六入滅。六入滅則觸滅。觸滅則受滅。  
受滅則愛滅。愛滅則取滅。取滅則有滅。有滅則生滅。  
生滅則老死憂悲苦惱滅。仏於天人大衆之中。説是法時。六百万億。  
那由佗人。以不受一切法故。而於諸漏。心得解脫。皆得深妙禪定。

〈略〉



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

22日

仏滅 亢

旧3月14日

月曜

妙法蓮華経化城喻品第七

ろく にゆう  
六入

「眼・耳・鼻・舌・身・意の六種の感覚器官」

十二因縁の第五、「六入」とは眼・耳・鼻・舌・身・意の六種の感覚器官のこと。

この六つを通して外から受けた刺激を取り入れるので「六入」というのです。

「六入」の「意」は「眼・耳・鼻・舌・身」から入ってくる情報をひとまとめにして受け取る器官です。

「意」の働きによって、自分を知り、仏さまの教えを知るための刺激を受け入れることができます。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

3月

23日

先負 軫

旧2月14日

土曜

妙法蓮華経化城喻品第七

しよく

## 触

「外界の刺激に触れる」

十二因縁の第六、「触」とは外界の刺激に触れ  
感じること。

「六入」が受け止めた刺激を、色や形・音・味・  
香り・触感などとして、初めて感じる小さい子  
供の頃のような状態です。

「六入」の「意」は仏さまの教えを刺激として受け  
入れるので、子供の頃によい教えに触れること  
が「触」を育てるために大事になるわけです。  
大人になってからでも遅くはありません。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

24日

赤口 房

旧3月16日

水曜

妙法蓮華経化城喻品第七

じゆ

受

「感情のこと」

十二因縁の第七、「受」とは「触」で受け止めた  
感覚を、好ましいか否かと感じるはたらき。  
すなわち感情のことです。

春になって暖かさを感じるのは感覚「触」、春に  
咲く花を美しいと感じるのが感情「受」です。

幼児期の周囲の人との関わりや置かれた環境に  
よって感情が育まれていくように、私たち凡夫  
は仏さまの教えに触れて受け入れることによっ  
てより善い「受」が育まれていくのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

25日

先勝 心

旧3月17日

日 木曜

妙法蓮華経化城喻品第七

愛 あい

「愛憎のこと」

十二因縁の第八、「愛」とは「愛憎」のこと。

すなわち、好ましいものを愛し、不愉快に感じるものを憎むこと。

愛するものは自分のもとにとどめ、憎いものからは離れようとする心が起こります。

「愛」があるから、その反対の「憎」が生じます。

仏さまは「愛」も「憎」もなく、すべてを慈しんでくださるから安心できるのです。

「愛」ゆえに人が仏に成るのは難しいのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

26日

友引 尾

旧3月18日

金曜

妙法蓮華経化城喻品第七

取 しゆ

「選択すること」

十二因縁の第九、「取」とは選択すること。

「愛憎」が生じると、愛するものをそばに置きたくなり、憎むものを遠ざけたくなくなります。

そして、あれが欲しい、これも欲しいと欲望が起こり、手に入らなければ不満が生じます。

選択の余地がなければ分かち合えることも、何らかの選択によって自分の欲望を満たすことができるとなると餓鬼の心が表れます。

かづくの選択が争いを生むことになるのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

27

日

先負 箕

旧3月19日

土曜

妙法蓮華経化城喻品第七

有う

「差別の事」

十二因縁の第十、「有」とは差別のこと。

「取」の選択で、自分が好ましいものを選び、都合なものや遠ざけると差別が生まれます。

利害損得で生じた差別が、他者との折り合いがつかなくなると争いが生じます。

仏さまの広大な心をもっていただければ、自分の都合で物事を差別しないでしょう。

私たち凡夫は差別に囚われているうちに一生を終えてしまうのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

28日

仏滅 斗

旧3月20日

日曜

妙法蓮華経化城喻品第七

しょう

生

「よりよく生きる」

十二因縁の第十一、「生」とは生活のこと。

「有」という差別に囚われ、自分の都合に振り回されているうちに一生が終わってしまいます。

そして、現世に造った罪業は、生まれ変わっても来世に受け継がれるといわれます。

今からでも挽回するため、仏さまの教えを学びよりよい生活を送らなければなりません。

現世に満足して生きている人は、さらに徳を積みよりよい明日を築きましょう。

妙法蓮華經化城喻品第七

爾時大通智勝如來。受十方諸梵天王。及十六王子請。即時三轉。  
十二行法輪。若沙門。婆羅門。若天。魔梵。及余世間。所不能轉。  
謂是苦。是苦集。是苦滅。是苦滅道。及広説。十二因縁法。無明縁行。  
行縁識。識縁名色。名色縁六入。六入縁触。触縁受。受縁愛。愛縁取。  
取縁有。有縁生。生縁老死憂悲苦惱。無明滅則行滅。行滅則識滅。  
識滅則名色滅。名色滅則六入滅。六入滅則觸滅。觸滅則受滅。  
受滅則愛滅。愛滅則取滅。取滅則有滅。有滅則生滅。  
生滅則老死憂悲苦惱滅。仏於天人大衆之中。説是法時。六百万億。  
那由佗人。以不受一切法故。而於諸漏。心得解脫。皆得深妙禪定。



# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

4月

29日

大安 女

旧3月21日

日 月曜

妙法蓮華経化城喻品第七

ろう し う ひ く のう

老死憂悲苦恼

「老いて死しても憂悲苦恼は引き継がれる」

十二因縁の第十二。

仏さまの教えに出会うことなく十二因縁を進んでいると、不安に満ちた生活を送り老い、悩み悲しみ苦しみを抱え死んでしまうでしょう。

苦悩が「無明」から始まるのであれば「明かり」を求め、仏さまの教えを学びましょう。

そして、来世にまで憂悲苦恼を引き継がないように、仏さまの教えを実践しようという心がけが大事なのです。

# 法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

3月

30

日

土曜

仏滅 箕

旧2月21日

妙法蓮華経化城喻品第七

じゅん

かん

順観と逆観

ぎやつ

かん

「十二因縁を一つずつ滅していく」

十二因縁で苦悩が「無明」から始まることを「順観」、苦悩を滅するため「無明」から滅することを「逆観」といいます。

お釈迦さまは菩提樹下で、順・逆の両方から、苦悩を見つめ成道したと伝えられています。

十二因縁を「順観」し、いつまでも繰り返して救われないので、「無明」から一つずつ制御し、滅する努力をすることで、苦悩から脱出する道を示されたのです。

妙法蓮華經化城喻品第七

〔略〕

爾時大通智勝如來。受十方諸梵天王。及十六王子請。即時三轉。十二行法輪。若沙門。婆羅門。若天。魔梵。及余世間。所不能轉。謂是苦。是苦集。是苦滅。是苦滅道。及広説。十二因縁法。無明縁行。縁識。識縁名色。名色縁六入。六入縁觸。觸縁受。受縁愛。愛縁取。取縁有。有縁生。生縁老死憂悲苦惱。無明滅則行滅。行滅則識滅。識滅則名色滅。名色滅則六入滅。六入滅則觸滅。觸滅則受滅。受滅則愛滅。愛滅則取滅。取滅則有滅。有滅則生滅。生滅則老死憂悲苦惱滅。仏於天人大衆之中。説是法時。六百万億。那由佗人。以不受一切法故。而於諸漏。心得解脫。皆得深妙禪定。